

# 国際試合に関する野球とサッカーの比較

日本においては、野球とサッカーがメジャーのスポーツの中に入っている。そこでこれらについて、国際試合に関する比較をしてみた。

野球は WBC で優勝するなど、世界最強クラスである。しかし実力的には、北京オリンピックも優勝できるのに、4 位に沈んだ。その理由は、後方支援（日本野球機構等の支援）が足りなかったからである。これについて、具体的にみってみる。準備期間が 1 週間程度であるため、寄せ集めのチームになり、チームが 1 つにならなかった。さらに、韓国等は国際親善試合を行なって調整しているが、日本はプロ野球選抜チームと 1 度壮行試合を行なっただけで、国際試合をやらなかった。これでは、国際試合の感覚がつかめない。本当にオリンピックで優勝する気があれば、シーズンを止めてでも、やらなければならなかったのに、シーズンを続行してやった。そのため、現役監督を選定できなかった。結局、星野仙一を監督にしたが、試合感が鈍っているのも、疑問が残る采配もあった。最も、読売の渡辺オーナーに遠慮して、小笠原などの読売の選手をあまり出さず、結局、自分の扱いやすい選手のみしか使用できず、本当の最強チームを組むことができなかった。

アジアシリーズに関しては、優勝はしたが、あまり力を入れていなかった。西武はあまり各球団の投手を研究しなかったため、実力の劣る中国の天津ライオンズ以外は、あまり打てず、点も取ることができなかった。また、外国人選手は日本シリーズ後に帰国したため、フルメンバーではなかった。一方で、野球界そのものがこの大会を軽視しているように見え、日本シリーズ後の日程も余裕がなかった。また、国民的にも感心が薄く、地上波でのテレビ中継がなかった。1 試合あたりの観客動員数にもあられ、1 万人未満であった。日本にとって、アジアシリーズで優勝してもステータスがあまりないのも、アジアシリーズが軽視されている 1 つの要因であるかもしれない。**余談であるが、阪神タイガースであれば、熱狂的なファンが殺到し、ほぼ満員になるかもしれないが**...

最も、今年はスポンサーもついていなく、このままだと来年以降の日本開催も厳しい状況である。一方、韓国や台湾で行なおうとすると、資金不足である。それらのことから、来年以降、アジアシリーズそのものの存続が危うくなっている。

日本の国内プロ野球には力をいれているが、国際試合にはあまり力をいれていない。これが日本の野球界の現状である。

一方サッカーは、対照的にワールドカップやオリンピックをやるときには、ある程度の後方支援をしてもらえる。まず、定期的に代表を徴集し、キャンプを行なっている。そのようにすることにより、各選手との意思疎通が行なわれ、チームの方針がまとまる。また、各選手の個性を出した戦術も練ることができる。必ず、本戦の前に国際親善試合（主にキリンチャレンジカップ）を取り入れ、本番を想定し、総合的なチェックをしている。また、国内リーグを停止させることにより、各クラブチームから選手を集め、国内組においては、ほぼフルメンバーを組むようにしている。このように、戦いやすい環境を整え、国際試合に臨むことができる。2010 年ワールドカップアジア最終予選の日本対カタールでは、3 対 0 で勝利し、一応の成果は出している。しかし、野球に比べれば、サッカーは FIFA ランキングが 40 位前後で、実力自体があまりない。特に、北京オリンピック（U-23）では、予選リーグを 1 回も勝つことができなかった。

ここまでのことをまとめてみる。野球は実力があるのにもかかわらず、日本野球機構等の支配者階級が国際試合に力を入れていないため、国際舞台で思ったほどの成果を残せないときがある。一方、サッカーは国際試合の対策は行なっているが、それだけではこれ以上の結果の向上が見込めない。このように、野球とサッカーは対照的な状況である。

最後に今後、どのようにして国際試合に取り組み、国際舞台における地位を高めていくかを素人なりに考えてみた。野球は日本野球機構等の支配者階級が変化しなければならない。特に、読売の渡辺オーナーの独裁体制を終わりにしなければならない。野球は読売のものではなく、ファンみんなのものである。それから、もう少し国

際試合を増やしたほうがいい。それにより、選手たちが国際ルールに適応できるようになるとともに、情報を共有するようになり、チームとしてもまとまることができる。また、それにより国際的に野球を広める役割もある。一方、サッカーは基本的な技術を向上させ、プレーの精度を高める必要がある。そのためには、基本的な練習の時間を長くして、徹底的に行なっていく必要がある。それから、国内リーグの底上げが必要である。そのようにするには、J1 のチーム数を減らし、少数精鋭にするべきである。それにより競争力が高まり、技術も向上する。また、チーム数が少ないほうがサポーターも分かりやすいだろう。